

中学生の部 最優秀賞

「孤独」の音

日本女子大学附属中学校 1年 野村 萌乃佳

作品名『吾輩は猫である』

選んだ一行 呑気と見える人々も、心の底を叩いてみると、どこか悲しい音がする。

人間の視点ではなく猫の視点で描く『吾輩は猫である』。この本で私の心に深く突き刺さった一文がある。それは「呑気と見える人々も、心の底を叩いてみると、どこか悲しい音がする」という文だ。悲しみを形にしたもの、それは涙だ。しかし涙を流していないからといって悲しんでいないわけでもない。悲しみをまぎらわせるために何か別の事をする人もいるし、心の奥底に悲しみを閉じこめる人もいる。この文でいう「呑気な人」も呑気をよそおっているだけで心の底では深い悲しみにくれている事もあったかもしれない。又、この文を「悲しい音がする」と書き「悲しんでいる」と書かなかつたのは「今」悲しんでいなくても過去の悲しみがまだ残っている人へ向けて何かを訴えたからではないかと思う。そこで、漱石が何を訴えたかったのか考えてみるとすぐ後の文で手がかりを得られそうなのがある事に気がついた。「迷亭君の世の中は絵にかいた世の中ではない」。私なりに解釈してみると、自分で描いた理想が現実になる事はないということになった。私はそうして考えているうちに、人生は自分の思い通りにいかず悲しんだり苦しんだりする時もあるという事を伝え、それと同時に喜びや楽しさを知ってほしいという漱石の思いがこの一文にこめられているのではないかと一つ一つの考えに行きついた。私はこの一文を漱石の訴えだとしてそこには色々な感情が絡んでいると考えたが、人によってさまざまならえ方ができると思う。そして、そういった所が面白いと思う。この文章を読んでいると漱石が「音」に例えたところは本当に音が聞こえるように思えてくるのが不思議だ。私の思う悲しい音は一回きりの少し低めの音が何度もこだまする音だ。即ち、「孤独」である。言葉で表しきれないものも音でなら表せると聞いた事がある。だから音は素晴らしいと。しかし私はこの漱石の文章を読み、読み手に自由を与えながらもある程度自分の意見も述べるといふ、絶妙なバランスがとれている文章こそが最も素晴らしいと思うようになった。

漱石の文章は先入観にとらわれる事がなく自由だ。するとそんな文章を読んでいる自分まで今までの先入観が無くなり、自由な考えを持てるようになっていくのだ。実に不思議な魅力が漱石の文章にはある。今までは宮沢賢治や太宰治、そして夏目漱石などの有名作家が書く文章は堅苦しいもの、そういう勝手な思い込みがあったので今素直にそう思っている事に、自分でも正直驚いている。読みはじめは渋々だったにしろ、私はこの『吾輩は猫である』から多くの事を学べた。だから今後も先入観にとらわれる事なく、沢山の本に出会い多くの魅力を知りたい。